

支那米の袋

夢野久作

青空文庫

ああ……すっかり酔っちゃったわ。……でも、もう一杯カニヤツクを飲ましてちょうだいね……。

あんたもお飲みなさいよ。今夜は特別だからサア……ええ^{わたし}。妾の気持ち^{わたし}が特別なのよ。今夜は……。

……そのわけは今話すわよ。話すから一パイお飲みなさいつたら……それあトテモ恐ろしい話なのよ。……ダメダメ。いくらあんたが日本の軍人だって、妾の話をおしまいまで聞いたら屹度^{きつと}ビツクリして逃げ出すにきまつているわよ。

……ああ美味^{おい}しい。妾もう一パイ飲むわ。へべれけになるわよ今夜は……ニチエウオ！……レストラン・オブラーコのワーニヤ

さんを知らないか……つてね。管くだを巻くわよ今夜は……オホホホ
ホホホ。……でも、あんたはその話を聞く前に、妾にいくらでも
お酒を飲ましていい理由わけがあるのよ。何故つて妾はこの間から何
度も何度もあんたを殺したくなつた事があるんですもの……マア。
あんな顔をして……ホホホホホホ。まあそんなに怖い顔をしない
でもいいから一杯お飲みなさいつたら、シヤンパンを抜いたから
サ……。

……アラ……何故いけないの。おかしな人ねあんたは……まあ
憎らしい。妾、そんな薄情物じゃないわよ。あんたを殺してお金
を奪とつたつて、いくらも持つてやしないじゃないの。亜米利加アメリカの
水兵の十分の一も持つていないこと妾チャンと知つているわよ。

ホラ御覧なさい。ホホホホホ。だからそんな余計な心配をしないで一パイお飲みなさいったら……飲まなけああんたを殺したいわけを話さないからいい……寝てる間に黙って殺しちゃうから……さあ……グツと……そうよ。サアも一つ……これは妾を侮辱した罰よ。ホホホホホホ。

今夜もそうなのよ。チョット電燈でんきを消すから、その窓から向家むこうの屋根を覗のぞいて御覧なさい……ホラ、あんなに雪が斑まだらになつて凍り付いているでしょ。妾はあの屋根の雪の斑を見るたんびにあんたを殺したくてたまらなくなるのよ。……だからそのたんびにお酒を飲むの。ウオツカでも、ウイノーでも、ピーヴオでも何でもいいの。そうすると忘れちゃってね。あんたを殺すのを忘れちゃ

つて寝てしまうから……ああ美味おいしい。妾おもう一杯飲むわ。

……イイエ真剣なの。ホントウに真剣なのよ。そうして今夜こそイヨイヨ本気になってあんたを殺そうと思つているのよ。だから今夜は特別なのよ……だつてあんたはちようどこんな晩に、妾わたしを生命いのちがけの旅行に連れ出して行つた男にソツクリなんですもの……背せの高さと色が違うだけで、真正面まともから見ているとホントに兄弟かと思う位よ。だからコンナに惚れちやつたのよ。……イイエ……ちつともトンチンカンな話じゃないの。妾、そんなに酔つてやしないわよ。カニヤツクなんかイクラ飲んだつて管なんか巻きやしないから……その訳はこうなのよ。まあお聞きなさいつたら……トンチンカンでもいいからサア……。

あんたはツイこの頃来たんだから知らないでしょうけども、この間、此浦塩ここを引き上げて行つた亜米利加アメリカの軍艦ふね。あの軍艦ふの司令官の息子でヤングっていうのが、その男なのよ。……ええ……司令官と同じにヤングっていうてね。名前だか苗字だかわからないけど、只そういつていたの……そうネエ。年は三十だつて云つていたけど、あんたと同じ位に若く見えたわ。六尺位の背丈おの巨男おでね。まじめな、澄まアした顔をしていたわ。あの軍艦ふの中でも一等のお金持ちで、一番の学者だつて、取り巻きの士官や水兵さん達がそう云つていたから本当でしょうよ。もつとも学者だつていうけど、あんたと違って歌も知っているし、音楽も出来るし、お酒はいくら飲んでも平気だし、ダンスでも賭博ばくちでも、

あんたよりズツト巧かつたわ……それからもう一つ……お話がトテモ上手だったの。イイエ。そんな六箇敷むずかしい話じゃないの。それあステキに面白い……トテモ恐ろしい恋愛の話よ。ヤングはその方の学者だって、自分でそう云っていた位だわ。

……ええ……そのヤングは軍艦が浦塩うらじおに着くと間もなく、このオブラーコの舞踏場へ遣やつて来て、一番最初に妾つかを捉つかまえて踊り出したの。そうしたら妾からだの身体が、ヤングの半分位しかなかつたもんだから、一緒に来た士官や水兵さん達が、みんなでワイワイ冷やかして、ピューピュー口笛を吹いたりしたの。……そうしたらヤングも一緒になつて笑いながら、妾をお人形さんのように抱き上げて、この室へやへ逃げ込んだと思うと、妾の内ポケットから

鍵を取り上げて扉をピツタリと掛けてしまったの。……その素早
かつた事……でもその時は、妾が店に突き出されてから、まだや
つと二日目位だったし、男ってどんなものか知らない位だったも
んだから、ホントウにビックリしてしまって、一生懸命ヤングの
軍服の胸に獅噛み付いていたわ。だけどヤングは、この室で二人
切りになると、トテモ親切に妾を慰めてくれたのよ。落魄男爵
の娘から、こんなレストランの踊り子にかわった妾の身の上話を、
シンカラ同情して聞いてくれたり、お料理やお菓子を色々取った
り、お酒をいくらでも飲んでくれたり、お金を持っているだけ、
みんな置いて行ってくれたりしたので、妾ホントウに嬉しかった
わ。それはみんな亜米利加の貨幣だったけど、主人は大ニコニコ

で私の頭を撫で、

「大手柄大手柄……あのお客人を一生懸命で大切にしろ……」
つて云つてくれたわ。

それからヤングは毎晩のように妾の処へ遣つて来たの。そうして妾とだんだん仲よしになって来ると、いろんな事を妾に教え初めたの。亜米利加の言葉だの、ABCの読み方だの、キツスの送り方だの……誕生石の話だの……花言葉だの……だけど、その中でも一等面白くて怖かったのは、やっぱり、そのステキな恋愛のお話だったわ。妾ホントに感心しちやったのよ。ヤングが何でもよく知っているのに……。

それは亜米利加のお金持ち仲間はで流行やる男と女の遊び方で、お

金持ちになればなる程、そんな遊びの方法しかたが乱暴なんですってさあ。……ええ……それはトテモ贅沢へやな室の仕掛けや、高価たかいお薬や、お金のかかる器械や、お化粧の道具なぞが、いくらでも要いるので、貧乏人にはトテモ出来ない遊びなんですってさあ。そうして亜米利加の若い男や女は、そんな遊びがしたいばかりに、一生懸命になつて働らいて、お金を貯ためているんですってさあ。

その遊び方法かたについていたら、それあ沢山あるわよ。みんなお話しするのは大変だけど、一寸ちよつと云つて見ればね……紅べにで作ったチユーインガムや薬みたようなものを使って、相手を血まみれの姿にし合いながらダンスをしたり……天井も、床も、壁も、窓掛けも、何もかも緋色ひいろずくめにした部屋の中に大きな蠟燭ろうそくをたつた

一本灯ともして、そのまわりを、身体中からだにお化粧して、その上から香においをベトベトに塗った素す裸はだか体の男と女とが、髪かみ毛のけを振り乱したまま踊りめぐったりするんですとさあ。そうするとその蠟燭ろうそくの光りの赤い色が、壁や、天井の色に吸い取られて、まるで燐お火にびのように生白く見えて来るにつれて、踊っている人達の身体の色がちようど、地獄に堕ちた亡もうじや者を見るように、赤や、緑色や、紫色に光って見えて来るんですって。それと一緒に身体じゅうの皮膚がポツポと火熱ほてり出して、燃え上るような気持ちになつて来るもんだから、その苦し紛れに相手をシツカリと掴まえようとすると……ホラ、油でヌラヌラしていてチツトモ力はいが這入はいらないでしよう。そのうちに、死ぬ程苦しくなつて、ヘトヘトに疲れて倒

れてしまふんですってさあ……ねえ。ずいぶんステキじゃないの。
……だけどまだ恐ろしい話があるのよ。

……エ……もう解つたつていうの……。嘘ばっかり……。わかる
もんですか。ズツトおしまいまで聞いてしまわなくちや、解りや
しないわよ。妾があんたを殺したがっている訳は……。まあ黙つて
聞いてらっしゃいたら……。上等の葉巻を一本上げるから……。

そうしてね……。そんな恐ろしい楽しみを続けて行くとそのうち
には、とうとう、どんなに滅茶苦茶な遊びをしても直じきに飽きる
ようになってしまふんですって。そうして最おしまい後には自分が可愛
いと思つている相手を、自分の手にかけてなぶり殺しか何かにして
終しまわなくちや、気が済まないようになるんですってさあ。……つ

まり自分の相手をまだ可愛がり飽きないうちに殺しては又、新しい相手を探し探しして行くのが、アメリカ亜米利加で流行る一番贅沢な遊びなんですってさあ……ホホホホホ。ビツクリしたでしょう。ねえあんた。誰だつてそんな話ホントにしやしないわねえ。妾もそんな時には嘘だつて笑い出した位よ。だつてそれあ男だつたらそんな事が出来るかも知れないけど、女がそんな乱暴な遊びをしようなんて思えやしないわ。ねえ。何ほ何でも……。

だけど、妾それからおとな溫柔しくしてヤングの話を聞いていたら、それがだんだん本当らしくなつて来たから不思議なのよ。亜米利加の女つてもものはそんな遊びにかけちや男よりもズツト気が強いんですってさあ。亜米利加の男や女にひとりもの独身生活者が多いのは、そ

んな遊びのステキな気持ちよさを知っているからで、そんな人達
に、方々から誘拐かどわかして来た、美しい男や女を当てがって、いろ
んなステキな遊びをさせる倶楽部くらぶだの、ホテルだのいうものが、
大きな街に行くとキツトどこかに在るんですってさあ……つまり
お金さえあれば、ドンナ事でも出来るのが亜米利加の風ふうだってい
うのよ。だから恋愛の天国っていえば、今の世界中で亜米利加よ
りほかに無いってヤングは自慢していたわ。

……でもね……その中でたった一つ、ドンナお金持ちでも滅多
に出来ない、一番ステキな、一番贅沢な、取つときの遊びがある
っていうのよ。ねえ……面白いでしょう……それはねえ。今云つ
たようにお金ずくで出来るいろんな素敵な遊びにも飽きてしまつ

て、どうにもこうにも仕様しようがなくなつた人の中の一人か二人かがやつて見たくなるステキなステキな、この上もない無鉄砲な遊びで、それこそホントにお金づくでは出来ない生命いのちがけの愉快な遊びなんですつてさあ……そう云つたらあんたはわかるでしょう。その遊び方が……え……わからないつて……まあ……

……だつてその遊びの本家本元は日本だつてヤングはそう云つたのよ。世界中のどこにも無くて日本にだけ昔から流行はやつてい
のを、この頃亜米利加の学者たちが大騒ぎをして研究を始めているので、トテモ有名な遊びなんですとさあ……そう云つてもわからない？……まあ……じゃもつと云つて見ましようか。

ヤングはそう云つたのよ。日本の芸術つてもものは何でもかんで

も世界中の芸術の一番いいところばかりを一粒選^えりにして集めたものなんですつてさあ……イイエ、オベツカじやないのよ。ヤングがそう云つていたんだから……妾なんかは解らないけど……だから日本では恋愛の遊びだつて、ほかの色んな遊びの仕方は、もうすっかり流行^{はや}り廃^{すた}つている代りに、その一番ステキなのがタツタ一つだけ、今でも残つていゝるんですつて。一つは日本人はお金をそんなに持たないから、ほかのお金のかかるのはみんな諦^{あきら}められてしまつて、その一番ステキなのだけで満足しているのかも知れな^いつて云うのよ。それをこの頃になつて亜米利加の学者たちが八^や釜^{かま}しくいつて研究しているけども、それはただ学問の研究だけで、本当にやつて見ようなんていう度胸のある人間は、まだ一人も亜

米利加に出て来ないんですってさあ……そんなステキな遊びが日本に在るのをあんた知らない……マア……そんな筈はないわ。ヤングは学者だから嘘なんか吐きやしないわよ。あんたは知っているけど気が付かないでいるのよ。日本ではそんなに珍らしくないから……。

……エ？……その遊びの名前ですって……それを妾スツカリ忘れちゃったのよ。イイエ本当よ……今に思い出すかも知れないけど……おぼえているのはその遊びの仕方だけよ。それあとテモ素敵な気持ちのいい遊び方で、聞いただけでも胸がドキドキする位よ。何でも亜米利加の言葉で云うと「恋愛遊びの行き詰まり」っていったような意味だったわよ。日本の言葉で云うと、もつと短

かい名前だったようだけど……え？……その遊びの仕方を云つて
みろつて？……厭いやいや々。……それは妾わざつと話さないでおくわ。
あんたが思い出さなければ丁度いいからね。おしまいの楽しみに
取つとくわよ。……ええ……今夜は妾はトテモ意地悪よ。ホホホ
ホホホ。

……でも、そんな話を初めて聞いた時には、妾わたしもうビツクリし
ちやつて髪かみのけ毛をシツカリと掴みながらブルブルふる慄えて聞いている
たようよ。その頃の妾は今よりもズツと初心うぶだったもんですから
ね……そんな話を平気でいいしい、青い顔をしてお酒を飲んでい
るヤングの軍服姿が、だんだん恐ろしいものに見えて来て、今に

も妾を殺すのじやないか知らんと思ひ思い、その高い薄っぺらな鼻や、その両脇くぼに凹くぼんでいる空色の眼や、綺麗まんなかに真まんなか中から分けた栗色の髪かみを見つめていたようよ。何だか悪魔と話しているよ
うな気がしてね……。

だけど、そのうちにヤングから、そんな遊びの仕方を、一番やさしいのから先にして一つ一つに教おそわって行くうちに、妾はもう怖くも何ともなくなってしまったのよ。……え……それあ本当の事はどうせアメリカ亜米利加の本場に行つて、色んな薬や器械を使わなくちや出来ないのが多かつたし、一番ステキな日本式の遊びや、そのほかの生命いのちがけの遊びは相手が無いから、只真まねかた似方と話だけですましたの。妾の身体からだに傷が残るようなのも店の主人に見つかる

と大変だから、ヤングと一緒に亜米利加に行つて結婚式を挙げてからの楽しみに取つといたけど、ほかのは大抵卒業しちやつたのよ。……それも初めのうちは、妾がヤングからいじめられる役で、首をもうすこしで死ぬとこまで絞しめられたり、縛つて宙釣りにされたり、髪かみのけ毛だけで吊るされたりして、とても我慢出来ない位、苦しかったり痛かったりしたのよ。だけどそのうちにだんだん慣れて来たたら、その痛いのが苦しいのが眼のまわるほどよくなつて来てね……妾があんまり嬉しそうにして涙をポロポロ流したりするもんだから、おしまいにはヤングの方が羨ましがって、いつも持つている小さな鞭むちを妾に持たして、それで自分の背中を思い切り打ぶつてくれつて云い出した位よ。

ええ……妾思い切り打ってやったわ。ヤングなら背中に鞭の痕きずが付いていても誰も気付かないでしょうし、妾も自分でいじめられる気持ちよさを知っていたんですからね……イイエ、音なんかいくら聞こえたって大丈夫よ。妾ヤングから教おそわった通りに呑のんきそうに流は行り歌うたを唄いながら、その調子に合わせて打ぶつていたから、外から聞いたって何かほかのものをたたいているとしか思えなかつた筈よ。……でも、そうして寝台の上に長くなっているヤングの脂あぶら切きった大きな背中を、小さな革かわの鞭で、カーパイにたたいている間の気持ちのよかつたこと……打てば打つほどヤングが可愛アいメくなつて来てね……そうしてもう、ヤングと一緒に亜ア米メ利リ加カへ行いつたら、そんな遊びが本式に大ピラで出来ると思うと、

楽しみで楽しみでたまらなくなっちゃったの。だから……妾は毎晩そんな遊びをする時間をすこしずつ裂さいて、ヤングを先生にして一生懸命に亜米利加の言葉を勉強し続けたのよ。

妾は言葉を覚えるのが名人なんですってさあ。ヤングがビツクリしていた位よ。ヤングとこんな話が出来ようになる迄には一と月とかからなかったし、水兵さん達と悪態のつきっこをする位の事なら、初めっから訳なかったわ。おしまいにはヤングがよくポケットに入れて持って来る英アングリウスクユガゼド字新聞が、すこうしずつ読めるようになったから豪えらいでしよう。自分の国の字だと聖書もロクに読めないのによ。ホホホホホホ。だって妾の両親は卜テモ貧乏で、妾を学校に遣やる事が出来なかったんですもの……お

化粧の道具なんかも、両親から買ってもらった事は一度も無かつたのよ。だけどこの時ばかりは学者の奥さんになるのだからと思つて、ずっと前から欲しくてたまらなかつた型の小さい、上品なのを別に買つて、バスケツトの底に仕舞^{しま}つておいたわ。ええ。それあ嬉しかったわよ。だつてどうせ両親に売り飛ばされて、こんな酒^{レストラン}場の踊り子になつてゐる身の上ですもの……おまけに生れて初めて妾を可愛がつてくれて、色んな楽しみを教えてくれたのが、そのヤングなんですもの……その頃の妾は今みたいな、オシヤベリの女じゃなかつてよ。どんな男を見ても怖ろしくて気味がわるくて、思うように口も利けない中に、たった一人そのヤングだけが怖くなかつたんですもの……アラ……御免なさいね。泪^{なみだ}

なんか出して……妾……男の方の前で、こんな事を云つて泣くのは今夜が初めてよ。ネ……笑わないでね。

そうしたら……そうしたらね、ちようどあと月だから十月の末の事よ。ヤングがいつになく悄気しよげた顔をして這入はいつて来て、この室へやで妾と差し向いになると、何杯も何杯もお酒を飲んだあげくにシヨボシヨボした眼付きをしながら、こんな事を云い出したの……。

「可愛い可愛いワーニヤさん。私はいよいよあなたとお別れしなければならぬ時が来ました。あなたを亜米利加へ連れて行く事も思い切らなければならぬ時が来ました。私は明日あすの朝早く、船と

一緒に浦塩うらじおを引き上げて布哇ハワイの方へ行かなければなりません。

そうして日本と戦争を始めなければなりません。そうなったら私は戦死をするかも知れないし、あなたを連れて行く訳にも行かなくなりしました。昨夜不意打ちに本国からの秘密の命令が来たので、どうする事も出来ないのです。……しかしもしも戦争が済むまで私が死なないでいたらキット貴女あなたを連れに来ます。ですから何卒どうぞ今度ばかりは諦めて下さい」

……って……そう云っているうちに、ポケットからお金をドツサリ詰めた革袋を出して、妾の手に握らせたの。

妾、その革袋を床の上にたたき付けて泣いちゃったわ。

「そんな事は嘘だ」

って云ってね。それあ日本が亜米利加と戦争を初めそうだっていう事は、ズット前から聞いているにはいたけれども、ヤングの話はあんまりダシヌケ過ぎて、どうしても本当とは思えなかったんですもの。だから、

「あんたは妾を捨てて行こうとするのだ。何でもいいから妾はあんたを離れない。一緒に軍艦に乗って行く」

……って云って死ぬ程泣いて泣いて泣いて泣いて泣いて泣いても聴かなかつたの。しまいには首ツ玉に獅^し噛^がみ付いて、片手で軍服のポケットをシツカリ掴んで離さなかつたの……。

ヤングは本当に困っていたようよ。軍服の肩の処に顔を当ててヒイヒイ泣きじやくっている妾を膝の上に抱き上げたまま、暫ら

ア、くジツとしていたようよ。けれどもそのうちにフイツと何か思おも出したもいたように私の顔を押し離すと、私の眼をキツト睨にらまえながら、今までと丸で違った低い声で、

「ワーニヤさん。いい事がある」

って云つたの。私はその時、何だかわからないままドキンとして泣き止みながらヤングの顔を見上げたら、ヤングは青白——イ、気味の悪い顔になって、私の眼をジ——イと覗き込みながらソロソロと口を利き出したのよ。前とおんなじ低い声でね……。

「ワーニヤさん。いい事がある。貴女あなたがそれ程までに私の事を思

つてくれるのなら、一つ思い切った事を遣やつつけてくれませんか。

私が今から海岸の倉庫へ行つて大きな麻の袋を取つて来ますから、

その中へ這入ってくれませんか。毛布を身体からだに巻きつけておけば、人間だか荷物だかわからないし、寒くもないだろうと思いますから、そうして私の荷物に化けて軍艦に来て物置の中に転がっていてくれませんか。そうすれば、そのうちに私がうまく父親の司令官に話して、貴女を士官候補生の姿にして、私の化粧室に住まわせて上げますから……その話が出るまで三度三度の喰べ物は、私が自分で持つて行つて上げます。随分窮屈つらで辛いでしょうけれども、暫くの間と思いますから辛しんぼう棒してくれませんか」

……つて……ネエあんたどう思つて……トテモ、ステキな思い付きじゃないの……イイエ、ヤングは本気で、そう云つていたのよ。妾だまを欺だましていたんじゃないの。もうすこし先までお話すると

わかるわ……ええ今話すわよ。話すからもう一杯飲んで頂戴……
曹達そうだを割って上げるからね……。

わたし

妾、この話を聞くと手をタタイて喜んじやったわ。だって今までに活動や何かで見たり聞いたりした「恋の冒険」の中のうちどれよりもズツと素敵じゃないの。女の児こが支那米しなまいの袋に這入って、軍艦に乗って戦争を見物に行くなんて……ねえ……妾あんまり嬉しかったもんだから、思い切りヤングに飛び付いてやったわ。そうして無茶苦茶にキスしてやったわ。

ヤングも嬉しそうだったわよ。今までになく大きな声を出して歌を唄ったりしてね。そうして妾に、

「……それではドツサリお酒を飲みながら待っていて下さい。今夜は特別に寒いようだから、袋の中で風邪を引かないようにね。

私はこれから袋を取りに行つて来ますから」

つて、そう云ううちに帽子を冠かぶつて外套を着て、どこかへ出て行つてしまったの。

妻、そんな時に一寸ちよつと心配しちやつたわ。ヤングがそのまんま逃

げて行つたのじゃないかと思つてね……だけど、それは余計な心配だったのよ。ヤングは間もなくニコニコ笑いながら歸つて来て妻の顔を見ると、

「……お寒い寒い……一寸ちよつと、その呼鈴ベルを押して主人を呼んでくれませんか」

つて云つたの。妾、ヤングの足があんまり早いのでビックリしちゃつてね。

「まあ……今の間にまもう海岸まで行つて来たの……そうして袋はどこに持つて来たの……」

つて聞いたたらヤングは唇に指を当てて青い眼をグルグルまわしながら妙な笑い方をしたの。

「シツ……黙つていらつしやい……近所の支那人に頼んで外に隠しておいたのです。今にわかりますから……」

つてね……そう云ううちに主人が這入つて来たたら、ヤングはいつもの通りその晩妾を買い切りにして、お料理やお酒をドンドン運び込ませて、妾に思い切り詰め込ましたのよ。……途中でお腹

が空かないようにね……そうして主人にはドツサリチップを呉くれて、面喰めんくらってピヨコピヨコしている 禿はげ頭あたまを扉ドアの外へ閉め出すとピツタリと鍵をかけながら、

「明日あすの朝十時に起してくれエツ」

……で大きな声で怒鳴どなったの。そうしておいて妾の手をシツカリと握ったヤングは、あの窓を指さしながらニヤニヤ笑い出したのよ……。

妾ヤングの怜悧りこうなのに感心しちゃったわ。あの窓はその時まで、もつと大きな二重硝子ガラスになっていて、その向うには、あんな鉄かなあ網みの代りに鉄の棒が五本ばかり並んでいたんだけど、その硝子ガラス窓はすを外して、鉄の棒のまん中へ寝台ベッドのシーツを輪にして引っかけ

て、その輪の中へ突込んだ椅子の脚を壁のふちへ引っかけながら、二人がかりでグイグイと引っぱると一本一本にみんな抜けちやつたの。……ええ……電燈を消していたんだから外から見たってわかりやしないわ。……その穴からヤングが先に脱け出して、あとから這い出した私を抱え卸してくれたの。

それは浦塩ここいら附近に初めて雪の降った晩で、あの屋根の白い斑まだら雪ゆきもその時に積んだまんまなのよ。風は無かったようだけど星がギラギラしていてね……その横路地に白い舞踏服姿の妾が、寝台ツドから取って来た白い毛布にくるまってガタガタに寒くなりながら立っていると、ヤングは大急ぎで、向家むこうの横路地の間から、隠しておいた支那米の袋を持って来て妾の頭の上からスポリと冠せ

てくれたの。そうしてそのまんま地びたの上にソツと寝かして、足の処をシツカリとハンカチで結ゆわえるとヤツトコサと荷かつぎ上げながら、低い声でこんな事を云つて聞かせたのよ。

「さあ……ワーニヤさんいいですか。暫くの間辛いでしようけども辛棒して下さい。私がもう宜しいって云うまでは、決して口を利いたり声を立てたりしてはいけませんよ」

ってね……。だけど妾は、その袋があんまり小さくて窮屈なのでビックリしちやったわ。妾の身体からだは随分小さいんだけど、それでも足を出来るだけグツと縮めなければ袋の口が結ばらないのですもの。おまけにその臭かったこと……停車場のはばかりみたいな臭いがしてね。ホコリ臭くて息が詰りそうで、何なんべん遍も何遍も

咳^{せき}が出そうになるのをジツと我慢しているのがホントに苦しかったわ。

それからどこを通って行ったのか、よくわからないけど、何でもこのスウェツランスカヤから横路地伝いに公園の横へ出て、公使館の近くを抜けながら海岸通りへ出たようなの。途中で下腹や腰のところ^{ところ}がヤングの肩で押えられて痛くてしようがなかったけど、やっとの思いで我慢していたわ。ええ。それあ怖かったわ。ヤングが時々立ち止まるたんびに誰か来たのじやないかと思つてね……。

海岸に来るとヤングは、そこに繋いであつた小さい舟に乗り込んで、妾をソツと底の方へ寝かして、その上に跨^{また}が^かつて自分で櫂^{かい}

を動かし始めたようなの……そこいらは、まだ暗くて、波の音が
タラリタラリとして、粗い袋あらの目から山の手の燈火あかりがチラリチラ
リと見えてね……妾は息が苦しいのも、背中が痛いのも、それか
ら足を伸ばしたくてたまらないのも忘れて、時々聞える汽笛の音
に耳を澄ましながら胸をドキドキさせていたわ。これが故郷のお
別れと思つてね……そうかと思うと亜米利加アメリカの町をヤングと連れ
立つて散歩している自分の姿を考えたり……ヤングと妾の幸福の
ために、イーコン様にお祈りを捧げながら、ソツと小さな十字架
を切つたりしていたわ。

そうすると間もなく、今までと丸で違った波の音が聞え出して、
小舟が軍艦に横付けになつたようなの。その時に妾は又ドキンと

して荷物のつもりで小さくなっていると、こっちからまだ何も云わないのに、上の方から男の足音が二人ほど、待っていたようにゴトゴトと音を立てて降りて来たの。そうしてその中の一人が低い声で、

「へへへへへ。今までお楽しみで……」

って云いかけたら、ヤングが同じように低い声で、

「シツ。相手は通じるんだぞ……英語が」

って叱ったようよ。そうすると二人ともクツクツ笑いながら黙り込んで、妾の袋をドッコイショと小舟の中から抱え上げたの。

その時に妾はチョット変に思わないじゃなかつたわ。何だか解らないけど、その二人の男の抱え方が、袋の中に生きた人間が居

るって事をチャンと知っているとしか思えなかつたんですもの。
一人は妾の肩の処を……それから、もう一人は腰の処を痛くない
ようにソーツとネ……だけどこれは大方ヤングが今の間に手真似
か何かで打ち合わせたのかも知れないと思つているうちに、一度
階段を降り切つた二人の足音は又、別の段々を降り始めて、今度
は波の音も何も聞えない、処々に電燈のついた急な階段を二ツば
かり降りて行つたの。

その時にヤングは、もうどこかへ行つていたようよ。……いい
え船の中はシンとしていたけど、いつヤングが消えてしまつたの
か解らなかつたわ……まあそう……出帆前つてそんなに忙がしい
ものなの……じゃ矢^や張^ばりあんだの云うように、あの軍艦はずつ

と前から出発の準備をして命令が来るのを待っていたんだわ。ね……そうでしょう……ヤングが出帆の日を知らなかったのは無理もないわ。そうして本当に日本と戦争をする気で出て行ったんだけど、途中で日本が怖くなったから止しちやっただしでしょう。……アラ……どうしてそんなに失笑ふきだすの。

イイエ、あんたがいくら笑ったってそうに違いないわよ。だつてヤングはおしまいまで一度も嘘を吐いた事つなんぞ無かつたんですもの。妾がヤングに欺あざむかれているように思うのはソレアあんたの嫉妬やきもちよ……まあいいから黙ってお酒を飲みながら聞いていらつしやい。あんたの気もちはよくわかつているんだから。もつとおしまいまで聞いて行くうちには、ヤングが云った事が本当か嘘

かわかるから……ね……。

……そうしたらね……。

そうしたら、あとに残って妾を抱えている二人の足音が又一つ、急な段々を降りて行くと、どこか遠い処に黄色い電燈がたった一つ点ともつている、暗い、板張りらしい処に来たの。それと一緒に二人の男は、イキナリ妾を固い床の上にドシンと放り出したもんだから妾は思わず声を立てるところだったわ。だけど又それと一緒に、これはどこか近い処に人間が居るからで、妾を荷物と見せかけるために、わざとコンナ乱暴な真似をしたのに違いないと気が付いたの。それでやっと我慢して、放り出されたなりにジツとしていたら、そのうちに誰も居なくなつたのでしよう。二人の男は

大きな声で話をしいしいユツクリユツクリと室^{へや}を出て行つたの。

「アハハハハハ。もう大丈夫だ。泣こうが喚^{わめ}こうが」

「ハハハハハハ。しかしヤングの智慧には驚いちやつたナ。露^ロ西^シ亜^アの娘つ子なんて、コンナに正直なもんたあ思わなかつたよ」

「ウーム。こんな素晴らしい思い付きは、彼奴^{あいつ}の頭でなくちや出て来つこねえ。何しろ革命から後^{のち}つてもものあ、どこの店でも摺^すれつ枯^からしを追い出して、いいとこのお嬢さんばかりを仕入れたつていうからな……そこを睨^{にら}んだのがヤングの智慧よ」

「成る程ナア……ところでそのヤングはどこへ行きやがつたんだろう」

「おやじん処^{とこ}へ談判に行つたんだらう。生きたオモチヤをチツト

ばかし持込んでいいかってよ」

「……ウーム。しかしなア……おやじがうまくウンと云えあ良いが……」

「それあ大丈夫よ。それ位の智恵なら俺だつて持つている。つまり時間が来るまでは、他の話で釣つといて、艦ふねの中を見まわらせねえようにしとくんだ。そうしてイヨイヨ動き出してから談判を始めせえすれあ、十が十までこつちのもんじゃねえか。……まさか引つ返す訳にも行くめえしき」

「ウーム。ナルホド。下手を間誤まごつ付けあ、良い恥はじき晒さらしになるつてえ訳だな」

「ウン……それにおやじだつて万まんざら更さらじゃねえんだかな……ヤ

ングはそこを睨んでいるんだよ」

「アハハハハちげ違えねえ。豪えれえもんだなヤングって奴は……」

「アハハハハハハハ」

「イヒヒヒヒヒヒ」

……妾こんな話をきいているうちにハッキリと意味はわからな
いまま、もうスツカリ大丈夫なような気になって、グーグー睡っ
てしまったのよ。

ええ……それあ大胆といえれば大胆なようなもんよ。だけど、そ
の時の妾はもう大胆にも何にも仕し様のようない位へトへトに疲れてい
たんですもの。最前からオブラーコで飲んだお酒の酔いと、今ま
で苦しいのを我慢していた疲つか勞れが一いち時じに出ちやって、いつ軍艦

が出帆の笛を吹いたか知らないままに睡っていたわ。

だけど、そうして眼が醒めてからの苦しくて情なかつた事……
軍艦の器械のゴットンゴットンという響きが身体からだに伝わるたんびに、毛布ごしに床板に押しつけられている背中と、腰骨と、曲つたまんまの膝ふしつ節とが、まるで火が付いたように痛むじやないの。妾はもう……早くヤングが来てくれればいい。そうしたら水か何かパイ飲ましてもらわなくちゃ、咽喉のどがかわいて死ぬかも知れない。そうしてモット大きな袋に入れてもらわなくちゃ……と、そればかり考えていたわ。そうして人にわからないように少しずつ寝がえりをしかけていると、不意に頭の上で誰かが口を利き出したので、妾は又ハツとして亀の子のように小さくなつてしま

つたの……それは何でも三四人の男の声で、妾のすぐ傍に突立つて、先刻さつきから何か話していたらしいの……。

「まだルスキー島はまわらねえかな」

「ナニもう外そと海よ」

「……ワン。ツー。スリー。フォーア……サアテン。フォテン……おやア……一つ足りねえぞこりやア……フォテン。ファイテン。シツクステン……と……あつ。足あしもと下に在ありやがった。締めて十七か……ヤレヤレ……」

「……様さまと一緒に天国までも……つて連中ばかりだ」

「惜しいもんだなあ……ホントニ……おやしえウンと云えあ、
布哇ハワイへ着くまで散々さんざんぱら蹴たおせるのになア」

「馬鹿野郎。布哇ハワイクンダリまで持つて行けるか。万一見つかつて世界中の新聞に出たらどうする」

「ナアニ。頭を切らして候補生の風ふうをさせとけあ大丈夫だつて、ヤングがそう云つてたじやねえか」

「駄目だよ。浦塩うらじおの一粒選りえを十七人も並べれあ、どんな盲目めくらだつて看破みやぶつちまわア」

「それにしても惜しいもんだナ。せめて比律賓ヒリッピンまでも許してくれとなア」

「ハハハまだあんな事を云つてやがる。……そんなに惜しけあ、みんな袋ごと呉れてやるから手前てめえ一人で片づけろ。割り前は遣らねえから」

「ブルブル御免だ御免だ」

「ハハハ見やがれ……すけべえ野郎……」

そんな事を云い合っているうちに一人がマッチを擦すつて葉巻に火を点つけたようなの。間もなく美しい匂いいがプンプンして来たから……。

だけど妾はそのにおいを嗅かぐと一緒に頭の中がシーーンとしちやつたの。身体からだが石みたように固くなつて息も吐つけない位になつちやつたの。……だつて妾みたようにしてこの軍艦に連れ込まれた者は、妾一人じゃないことが、その時にやつとわかりかけて来たんですもの……。妾のまわりにはまだ、いくつもいくつも支那米の袋が転がっているらしいんですもの……。おまけに、それを

どうかしに来たらしい荒くれ男が三四人、平気で冗談を云い合いながら葉巻を吹かしているじゃないの……あんまり恐ろしい、不思議な事なので、妾は、あと先を考える事も何も出来やしなかつたわ。ただ眼をまん丸に見開いて鼻っ先に被かぶさっている袋の粗あらい目を凝視みつめながら、両方のお乳を痛いほどギユツと掴んでいたわ……夢じゃないかしらと思つて……。

でも、それは夢じゃなかったの……そうして齒を喰い締めて、一心に耳を澄ましていると、ゴットンゴットンという器械の音の切れ目切れ目に、ドド——ンドド——ンつていう浪なみの音が、どこからか響いて来るじゃないの。……ええ……おおかた外ほかの女達ひとも妾とおんなじにビックリして小さくなつていたんでしよう。呼吸いき

をする音も聞えない位シンとしていたようよ。

そうしたら又その中に、その葉巻うちを持ってゐるらしい男が、一としきりスパスパと音を立てて吸い立てながら、こんな事を云い出したの。

「待て待て。片づける前に一ツ宣告をしてやろうじゃねえか。あんまり勿もつてえ体ねえから」

「バカ……止せつたら……一文にもならねえ事を……」

「インニヤ。このまま片づけるのも芸のねえ話だかなナ……エヘン」

「止せつたらチツク……そんな事したら化けて出るぞ」

「ハハハハ……化けて出たら抱いて寝てやらあ……何も話の種だ

……エヘンエヘン」

「止せつたら止せ……馬鹿だなあ貴様は……云つたつてわかるもんか」

「まあいいから見てろつて事よ……これあ余興だかなナ……俺の云う事が通じるか通じないか……」

つて云ううちに、そのヂツクつて男は、又一つ咳払いをしながらハツキリした露西亞^{ロシア}語で演説みたいに喋舌^{しゃべ}り出したの。

「エヘン……袋の中の別嬪^{べっぴん}さんたち。よく耳の垢^{あか}をほじくつて聞いておくんなハイよ。いいかね。……お前さん達はみんな情^{いひひ}人と一緒になりたさに、こんな姿に化けてここへ担^{かつ}ぎ込まれて来たんだらう。又……お前さん達の情^{いひひ}人も、おんなじ料簡^{りょうかん}で、

お前さん達をここまで連れて来たんで、決して悪気じゃなかったんだろうが、残念な事には、それが出来なくなっちゃったんだ。いいかい……だからね。……エヘン……だから怨むならば……いいかい……怨むならば、お前さん達の情いいひと人にこんなステキな智恵を授けた、ヤングという豪えらい人を怨まなくちやいけないんだよ。……それからもう一人……この艦ふねに乗っている俺たちの司たいし令官よを怨みたけあ怨むがいいってんだ。……イヤ……事によると、その司令官たいしやうだけを怨むのが本筋かも知れないがね……どつちにしても、お前さん達のいい人や、そんな連中に頼まれた俺達を怨んじやいけないよ。いいかい……という訳はこうなんだ。先さ刻つきヤングさんが司令官たいしやうに、お前さん達を亜米利加アメリカまで連れてつ

ていいかって伺いを立ててみたら、亜米利加の軍艦の中には、食^た料品^{べもの}より以外^{ほか}に肉類^{にく}を一切置いちやイケナイってえ規則になつて
いるんだツてさあ……だからね……折角^{せっかく}ここまで来ているのを
ホントにお気の毒でしようがないけど、ちようど風も追い手のよ
うだから、お前さん達はその袋のまんま、海を泳いで浦塩^{うらしお}の方
へ……」

ここまでその男が饒舌^{しゃべ}つて来たら、あとは聞えなくなつちやつ
たの。だって妾のまわりに転がっている十いくつの袋の中から、
千切れる^{ちぎ}ような金切声が一どきに飛び出して、ドタンバタンとノ
タ打ちまわる音がし始めたんですもの。中には聞いたような声が
いくつもあつたようだけど、そんな時に誰が誰だかわかりやしな

いわ。ただ耳が潰れるほどキーキーピーピー云うだけですもの。

　　だけど私は黙っていたの。声を出すより先にどうかして、袋を破いてやろうと思つて、一生懸命に藻搔もがいていたの。だけど袋が小さい上にトテモ丈夫に出来ているので、噛み付こうにも噛み付けないし、カーパイ足を踏ん張ると首の骨が折れそうになるし、その苦しきつたらなかつたわ。だけど、それでも生命いのちがけの思いで、力のありつたけ出して藻搔もがいているうちに、妾のまわりの叫び声が一ツ一ツに担ぎ上げられて、四ツか五ツ宛ずつ行列を立てながら階段を昇りはじめたの。その時にはチョツトの間まみんなの叫び声は止んだようだけど、その階段の音が聞えなくなると、又前よりも非道ひどい泣き声や金切声がゴチャゴチャに聞え始めたの。めい

ぬいに男の名を呼んでヒイヒイ泣いていたようよ。

だけど妾それでも泣かなかつたの。そうして死に物狂いになつて、両手で頭をシツカリと抱えながら、足の処の結び目を何度も何度も蹴つたり踏んだりしていたら、身体中が汗みどろになつて、かみのけ髪毛が顔中に粘り付いて、眼も口も開けられなくなつてしまつたの。その中うちに袋の中は湯気が一パイ詰まつたように息苦しくなつて来るし、髪の毛は顔から二の腕まで絡まつて、動くたんびにチクチク抜けて行くし、おまけに着物と毛布が胸の上の処でゴチャゴチャになつて、袋の中一パイにコダワリながら、お乳を上へ上へと押し上げるので、その苦しきつたら……もう死ぬかももう死ぬかと思つた位よ。そうしてそのうちに……御覽なさい。この臂ひじ

の処が両方ともこんなに肉が出てピカピカ光っているでしょう。

この臂はヤングが「猫キヤツエルボウの臂」って名をつけて、紐ニユーヨーク育婦人

の臂くらべに出すつて云つていたくらい柔らかくてスンナリしていたのが、知らないうちに擦すり破れてしまつて、動くたんびにヒリヒリと痛み出して来たんですもの。……それに気が付くと妾はもう、スツカリ力が抜けてしまつて、意地にも張りにも動けなくなつたようよ……両方の臂を抱えてグツタリとなつたまま、呼吸いきばかりセイセイ切らしていたようよ。

そのうちに又、上の方から四五人の足音が聞えて来ると、みんなの叫び声がまた、ピッタリとなつちやつたの。それに連れて降りて来る男たちの話声がよく聞えたのよ。器械の音とゴツチャに

なつたまま……。

「アハハハハ。非道^{ひで}え眼に会つちやつたナ。あとでいくらかヤングに増してもらえ」

「ヂツクの野郎が余計な宣告を饒舌^{しやべ}るもんだから見ろ……こんな血が出て来た」

「ハハハハ恐ろしいもんだナ。袋の中から耳^{みみたば}朶を喰い切るなんて……」

「喰い切つたんじやねえ。引き千切り^{ちぎ}かけやがったんだ。だしぬけに……」

「俺あ小便を引っかけられた。コレ……」

「ウワ——。あれあスチューワードが持ち込んだ肥^{ふと}つちよの娘だ

ろう。彼奴あいつの鞭で結ゆわえてあつたから……」

「ウン。あのパン屋のソニーさんよ。おかげで高価たけえ銭ぜにを払つた
ルパシカが台なしだ。とても五弗ドルじや合あわねえ」

「まあそうコボスなよ。女の小便えんぎなら縁起いが宜いいかも知れねえ」
「人をつけ……ウラハラだあ……」

「ワハハハハハ」

……だつてさあ……こんな事を云い合つて吞氣のんきそうに笑いなが
ら、その男たちは又四ツばかり叫び声を担かぎ上げたの。

「サア溫柔おとなしく溫柔しく。あばれると高い処から取り落おちしますよ。
落おちたら眼の玉が飛び出でしますよ」

「小便おなんぞ引ひっかけないように願ねがいますよだ。ハハハハハハ」

「ドッコイドッコイ……どうでえこの腹部ポツポのヤワヤワふつくりとした事は……トテモ千金せんきんこてえられねえや」

「アイテツ。そこは耳みみたぼ朶ぼじゃねえつたら……アチチチ……コン畜生……」

「ハハハハ。そこへ脳天を打ぶつ付けねえ。その方が早はやえや」

「アイテテ……又やりやがつたな……畜生ツ……こうだぞ……」

つて云ううちに、……ギヤーツて云う声が室へや中じゆうにビリビりする位響いて来たの。

その声を聞くと妾は又夢中になってしまつて、身体中からだにありたけの力を出しながら、床の上を転がり始めたの。そうして出来るだけ電燈の光りの見えない方へ盲目めくらさぐ探りに転がつて行って、何

かの陰を探して隠れよう隠れようとしていたの。そうすると今度は男たちの靴の音が離れ離れになって、一人か二人宛^{ずつ}あとになりたり先になったりしながら——次から次に担ぎ上げて行くうちに、とうとう、室^{へや}の中の叫び声が一ツも聞こえなくなってしまうたのよ。ただ軍艦の動く響きと、微かな波の音ばかり……人間の居るらしい音は全く無くなってしまうてね……。

その時に妾はやつと、すこしばかり溜息をして気を落ちつけたようよ。妾の袋はキツト何かの陰になって、見えなくなっているのに違いないと思ひ思ひ、顔中にまつわっている髪の毛を掻き除^のけながら、なおも、ジツと耳を澄ましていたようよ。

そうすると、それから暫く経って、もうみんなどこかへ行つて

終しまったと思う頃、今度はたった一人の、重たい、釘だらけの靴の音が……ゴトーン、ゴトーンと階段を降りて来たの。そうして室へやのまん中に立ち止まって、そこいらをジーイと見まわしながら突つ立ったっているようなの。

……その時の怖かったこと……今までの怖さの何層倍だったか知れないわ……妾の寿命はキツトあの時に十年位縮まったに違いないわよ。……もう思い切り小さくなって、いつまでもいつまでも息を殺していると、そこいら中があんまり静かなのと、気味が変わるのとで頭がキンキン痛み出して、胸がムカムカして吐きそうになって来たの。それを我慢しよう我慢しようと藻搔もがいていたために身体からだじゆうが又、冷汗でビツシヨリになってしまったの。

そうすると、もうどこかへ行ったのか知らんと思つていたその男が馬鹿みたいにノロノロした、変テコなどうまごえ胴間声で口を利き出したの。

「……どうしても一ツ足りねえと思うんだがナア……みんなは、おらが三人担いだというけれど、おらあ二遍しけあはしごだん階子段を昇らねえんだがなあ……」

その声と言葉付きを聞いた時に、妾は又、髪の毛が一本一本馳け出したように思ったわ。齒の根がガクガク鳴り出して、手足がブルブル動き出すのをどうする事も出来なかつたわ……だつてその声っていうのは、ずっと前に一度オブラーコのレストラン酒場へ遊びに来て、さんざっ散々パラ水兵たちにオモチャにされて外に突き出され

た、大きな嫌らしい黒ん坊の声だったんですもの。……その時にその黒ん坊が恨めしそうな、もの凄い眼付きで妾たちをふり返った顔を、袋の中でハッキリと思い出したんですもの……怖いにも何にも、妾は生きた空がなくなつて、もうすこしで気絶しそうになつた位よ。今にもゲーツと吐きそうになつてね。そうするとその黒ん坊は、

「どうしても無いんだナア……可笑しいナア……」

つて云いながらマツチを擦つて煙草を吸い付け吸い付け出て行きそうに歩き出したの。……そんな時の嬉しかったこと……妾は思はず手の甲に爪が喰い入る程力を籠めてイーコン様を拝んじやつたわ。

……だけど矢つ張り駄目だったの……階段の方へノロノロと歩いて行つた黒ん坊は間もなく奇妙な声を立てながらバツタリと立ち止まったの。

「イヨーツ。あんな処に隠れてら。フへ、フヒ、フホ、フム……畜生畜生」

と云うなり、ツカツカと近づいて来て、妾の袋へシツカリと抱き付いちやつたの。それと一緒にきなくさ黄臭い煙草のにおいと、何ともいえない黒ん坊のアノ甘つたるいにおい体臭とがムウーと袋の中へ流れ込んで来たようなの。

妾、その時に、どんな風に暴れまわつたか、ちつとも記憶おぼえていないのよ。……ただ、ちつとも声を立てなかつた事を記憶おぼえて

いるだけよ。誰か加勢に来たら大変と思つてね。……だけどその黒ん坊も、ウンともスンとも云わなかつたようよ。おおかた一人で妾をどこかへ担いで行つて、どうかしようと思つたのでしよう。暴れまわる妾を何遍も何遍も抱え上げかけては、床の上に取り落し取り落ししたので、そのたんびに妾は気が遠くなりかけたようよ。

だけど、それでも妾は声を立てなかつたの。そうしてヤツサモツサやっているうちに、どうした拍子か袋の口が解けて、両足が腰の処までスツポンと外へ脱^ぬけ出した事がわかつたの……。

それに気が付いた時に妾がどんなに勢よく暴れ出したか……アラ又……笑つちや嫌^{いや}つて云うのに……ソレどころじゃなかつたわ

よ、ソンの時は……何でもいいから……足が折れても構わないからこの黒ん坊を蹴殺して、その間に袋から脱け出してやろうと思つて、頭でも、顔でも、胸でもどこでも構わずに蹴つて蹴つて蹴飛ばしてやったわ。……ええ……黒ん坊も一生懸命だったよ。袋の上からシツカリと組み付いて来て、片つ方の手で妾の両足を押えようとするのだけでも、妾の両足を一緒に掴まえる事はなかなか出来ないし、片つ方だけ掴つかまえても妾が死に物狂いで蹴飛ばしてやったもんだから、しまいにはセイセイ息を弾はずませて、妾の足と掴み合い掴み合いしながらあっちへ転がり、こっちへ蹴飛ばされしていたようよ。……だけど、そのうちに妾の着物と毛布が両手と一緒に、だんだん上の方へ上つて来て、息が出来ない

位に切なくなつて来ると、黒ん坊はとうとう妾の両足を捉まえて、足首の処を両手でギューと握り締めちやつたの。

そんな時に妾は、初めて、大きな声を振り絞つたわ。両手を顔に当てて力一パイ反りかえりながら、

「助けて助けて助けて。ヤングヤングヤングヤング」

つてね。ええ……それあ大きな声だったわよ。咽喉のどが破れる位どな呶鳴どなつてやつたんですもの。そうして両足を押えられたまま、起き上つては反りそかえり反りかえりして、固い床板の上に頭をブツ付け始めたの。死んだ方がいいと思つてね。

そうしたら黒ん坊もその勢いに驚いて、諦らめる気になつたんでしよう。

「……ウウウウ……そんなに死にてえのかナア……」

つて喘ぎ喘ぎ云いながら、妾の両足を掴んで、床の上をズルズルと、片隅に引っぱって行くと思つたら、そこに置いてあつたらしい細い針はり金がねで、足首の処から先にグルグルグルと巻き立てて、胸の処まで袋ごしに締め付けてしまったの……。

その時の苦しきつたら、それあ、とてもお話したつて解かりやしないわよ。だつてチョツトでも太い息をするか、動くかすると、すぐに長い細い針金が刃物みたいに喰い込んで、そこいら中の肉が切れて落ちそうになるんですもの……それでいて、いくら喘あえいでも喘いでも喘ぎ切れない位息が切れているんですもの……妾はそのまま直ぐに気が遠くなつちやつた位なの。だけでも又す

ぐに苦しまぎれに息を吹きかえすと、又もや火の付いたように針金が喰い込むでしょう。地獄の責め苦ってほんとうにあの事よ。そうして息も絶え絶えにヒイヒイ云っているうちに今度は本当に気絶してしまつたらしいの。

それから何分経つたか、何時間経つたのかわからないけど、又自然と息を吹き返した時には、妾はもう半分死んだようになっていたようよ。手や足の痛さがわからなくなつてしまつてね。……そうして眼だけを大きく見開いてどこかを凝視^{みつ}めていたようよ。だからその時に聞いた話も、夢みたように切れ切れにしか記憶^{おぼ}えていないの。

「……どうでえ。綺麗な足じゃねえか」

「ウム。黒人の野郎、こいつをせしめようなんて職過ぎらあ」

「面が歪んだくれえ安いもんだ。ハハン」

「しかし、よつほど手酷く暴れたんだな。あの好色野郎が、こ

んなにまで手古摺ったところを見ると……」

「フフン、勿体なくもオブラーコのワーニヤさんだかな」

「ウム。十九だつてえのに惜しいもんだナア……コンナに暴れちやつちや、ヤングだつて隠しとく訳に行くめえが……」

「……シーツ……来やがった来やがった……」

つて云ううちに、又一人、スパリスパリと煙草を吹かしながら、軽い、気取った足取りで階段を降りて来て、悠つくり悠つくりと

妾の傍に近づいた者が居るの……。

その足音を聞くと妾は気もちが一ペんにシヤンとなつちやつたわ。飛び上りたい位嬉しくなつて……ヤング……つて叫ぼうとしたのよ……。

だけど妾が起き上ろうとすると、手や足が、胸の処まで氷みたようになつて、動かなくなつていることがわかつたの。それと一緒に、声がピツタリと咽喉のどにつかかえてしまつて、名前を呼べる位ならまだしも、声を立てる事すら出来なくなつてゐるじゃないの。何だかそんな夢でも見ているように胸の処が固こわばつてしまつてね。もしかすると、あんまり怖い眼に会い続けたので気が変になつていたのかも知れないけど……。

そうするとヤングは、長い長い大きな溜め息を一つしてから、静かな、猫撫で声かと思うくらい優しい口調で、こんなお説教を妾にして聞かせたの。上品な露西亞語でね……。

「ワーニヤさん。溫柔おとなしくしていて頂戴……。私は貴女あなたが憎いから、こんな事をするのじゃありません。よござんすか。よく気を落ち着けて聞いて頂戴……。ね。私は貴女が可愛いくて可愛いくてたまらない余りにコンナ事をするのです。私は貴女が、あんまり綺麗で可愛いから、亜米利加アメリカの貴婦人と同じようにして殺してみたくないので。ね。いつぞやお話して上げた恋愛ごつこの事を、まだ記憶おぼえていらつしやるでしょう、ね、ね、わかつたでしょう。……私は最早もう近いうちに日本と戦争をして戦死をするので

す。ですからもう、貴女以外の女の人と結婚する事は出来ないのです。貴女と一緒に天国に行くよりほかに楽しみは無くなったのです。ですから満足して、私の云う事をきいて頂戴。ね、ね、温お柔となしく私の云う通りになって死んで頂戴。ね、ね……わかつたでしよう。ね、ね……」

そう云ううちにヤングは妾の足に捲かかった針金を解き始めたの。そうして胸の上までユツクリユツクリ解ほどいてしまうと、

「サアサア。寒かったでしょうね」

って云いながら、又、もとの通りに袋を冠かぶせて口をシツカリ括くくつてしまったの。

ええ……妾はちつとも手向いなぞしなかつたわ。死人のように

グツタリとなつて、ヤングのする通りになつていたわよ。

その時のヤングの声の静かで悲しかつたこと——ほんのちよつと一寸の間まだつたけど、妾の胸にシミジミと融とけ込んで、妾に何もかも忘れさしてしまつたのよ。……何だか甘い、なつかしい夢でも見ているような気もちになつてね……ネンネコ歌にあやされて眠つて行く赤ん坊みたように、涙が止め度なく出て来たもんだから、妾はどうとう声を出してオイオイ泣き出しちやつたの。

「……ヤング……ヤング……」

つて云つてね……そうするとヤングは一々丁寧に返事をしいしい妾を袋に入れてしまつてから、今一度妾の頭の処を、袋の上から撫でてくれたわ。

「……ね……ね……わかったでしょう、ワーニヤさん。溫柔おとなしくするんですよ。サアサア。もう泣かないで泣かないで。いいですか。ハイハイ。私がヤングですよ。いいですか。サ……泣かないで泣かないで」

そう云つて妾をピツタリと泣き止まして終しまうと、静かに立ち上つて、這入つて来た時と同じように気取つた足音を立てながら、悠々と階段を昇つてどこかへ行つてしまつたの。

だけど妾は、やっぱり夢を見ているような気持ちになつて、シヤクリ上げシヤクリ上げしながらグツタリとなつていたようよ。そうすると、あとに残つた三人の男たちは手てん手でに妾の頭と、胴と、足を抱えて、上の方へ担かげ上げながら、黙りこくつて階段を

昇りはじめたの。そのゆっくりゆっくりした足音が、静かな室^{へや}の中にゴトーンゴトーンと響くのを聞きながら、妾は何だか、教会の入口を這入って行くような気持ちになっていたようよ。

だけど第一の階段を昇ってしまうと間もなく、一番先に立って、妾の足を抱えていた男が、変な声でヒョツクリと唸^{うな}り出したの。そうして何を云うのかと思っていると、

「ウーム。ウメエもんだナア。ヤングの畜生、あの手で引っかけやがるんだナア。どこへ行っても……」

って、サモサモ感心したように云うの。そうすると妾の腰を担いでいた男も真似をするように唸り出したの。

「ウーム。まるで催眠術だな。一ペンで温順^{おとな}しくしちまやがった」

そうすると又、妾の頭を担いでいた男が、老人としよりみたような咳をゴホンゴホンとしながら、こんな事を云つたの。

「十七人の娘うちの中で、ワーニヤさんだけだんべ……天国へ行けるのはナア」

「アーメンか……ハハハハハ」

こんな事を云っているうちに、又二つばかりの階段を昇ると、ザーザーという波の音がして甲板へ出たらしく、袋の外から冷たい風がスースーと這入って来て、擦すり剥むけた臂ひじの処ひじが急にピリピリ痛み出したの。それと一緒に明るい太陽の光りが袋の目からキラキラとさし込んで来て、眼くまが眩くらむくらいマブシクなつたので、妾は両手で顔をシツカリと押えていたようよ。そうしたら足を抱

えていた男が、

「サア……天国へ来た……」

「ウフフフ。ワーニヤさんハイチャイだ。ちつとハア寒かんべえけれど」

「ソレ。ワン……ツー……スリイツ……」

と云ううちに、妾をゆすぶっていた六ツの手が一時いちどきに離れると、妾はフワリと宙に浮いたようになったの。

その時に妾は何かしら大きな声を出したようよ。……やつと夢から醒めたようにドキンとしてね……だけど、そう思う間もなく、妾の頭が、船の外側のどこかへ打ぶつかるいっしょと一処いっしょにガーンとなつてしまつて、いつ海の中へ落ち込んだかわからなかつたの……。

それから又、妾が気が付いて眼を開いたのは、一分か二分ぐら
い後の^{のち}のようにしか思えないのよ……何だか知らないけれど身体中^{からだ}
に痺れ^{しび}が切れて、腰から下が痒^{かゆ}くて痒くてしようがないように思
っているうちに、フイツと眼を開^あいてみたら、そこは忘れもしな
いこのレストランの地下室でね。いつぞや肺病で死んだ二ーナさ
んが寝かされていたその寝台^{ベッド}の上に、湯タンポと檻^{ぼろ}褌^きつ布片^{きれ}で包
まれながら、素^すっ裸^{ばだか}体^かで放り出されているじゃないの。おまけに
寝台^{ベッド}の横でトロトロ燃えているペーチカの明^{あか}りでよく見ると、妾
の手や足は凍傷で赤ぶくれになっていて、針金の痕^{あと}が蛇^{へび}みたい
にビクビクと這^よいまわっている上から、黒茶色の油膏^{あぶらぐすり}薬^{すり}がベトベ
トダラダラ塗りまわしてあるじゃないの。その汚^{よご}ならしくて気味

の悪かったこと……妾何だかわからないままビックリして泣き出しちやつた位よ。

……だけど、それから間もなく料理番の支那人が持つて来てくれた魚汁ウハーの美味おいしかったこと……その支那人のチーつていうのに聞いてみたら、その時は妾が死んでからちようど二日目だったそうよ。……妾の袋は、ルスキー島から二海里ばかりの沖へ投げ込まれると間もなく、軍艦と擦れちがつたジャンクに拾われたので、その船頭の女房の介抱で息を吹き返したんですってさあ。十七番のナターシャさんも同じジャンクで拾われていたし、パン屋のソニーさんも鯨捕り船だったかに拾われて来たのを、白軍の巡邏じゅんら船せんが見付け出して警察に引き渡したんですって。だけど、みんな

な水をドツサリ飲んでいたんで駄目だったんですとさあ。そのほかの袋は十日ばかり経ってから、タツタ二個だけ、外海そとうみの岸に流れ付いたそうよ。妾怖いから見に行かなかつたけど……ホントに可哀そうでしょうがないの……。

妾……この話をするのはあんたが初めてよ。いいえ……誰も知らないの……みんな死んでいるから……。

それあ浦塩ここではかなり評判になつていらしいのよ。……ええ……あんたが知らないのは無理もないわよ。あんたはまだ浦塩ここに来ていなかつたんですからね。おまけに警察うちでもこの家うちでも、まだ秘密うちにしているから、新聞にも何も書いてないそうよ。おおか

たアメリカ亜米利加を怖がっているのです。あの軍艦がしたらしい事は、みんな感づいているんですからね。

ええ……それあ何遍も何遍も訊きかれたのよ。一体どうしてこんな眼に会わされたのかつてね。妾が気が付いてから後のちの一週間ばかりというもの、警察の人や、うちの主人や、そのほかにも役人らしいエラそうな人が何人も何人も、毎日のように妾の枕元に遣つて来ちや、威おどしたり、賺すしたりしながら、ずいぶん執拗しつこく事情を尋ねたのよ。……おしまいには先方むこうから色んな事を話して聞かせてね……あのヤングっていう士官はトテモ悪い奴で、今年の夏に浦塩うらじおに着いた時に、軍艦の荷物が税関にかからないのをいい事にして、阿片あへんをドツサリ浦塩うらじおに持ち込んで、方々に売り付け

てお金を儲けた事がチャンとわかってるんだ……だけでも遣り方がナカナカ上手でハッキリした証拠が上らないために、どうすることも出来ないでいたんだ。……そうしたらヤングの畜生めスツカリ浦塩うらじおの警察を舐めてしまったらしく、今度は配下てしたの水兵にお金を遣るかどうかして、めいめいの色女を十何人も軍艦に担かつぎ込んで、上海シャンハイかどこかの市場ころしばに売りに行こうとしやがった。……けれども軍艦が沖へ出ると、それが上官に見つかるかどうかしたもんだから、一つ残らず海の中へ放り込ましてしまったのが、やっぱりあのヤングって奴なんだ。……しかもその中で生き残っているのはお前一人なんだからトテモ大切な証人なのだ。俺達はお前の仲間十何人の讐かたきを取ってやろうと思っっているのだから、

早く気をシツカリさして返事をしてくれなければ困る。御褒美ごほうびの金かねはいくらでも遣るから本当の事を云つてくれ……一体お前は何と云つてヤングに欺されたのか。どうして船の中に連れ込まれたのか。そうしてドンナ間違ひから海の中に放り込まれるような事になったのか……ナンテいろんなトンチンカンな事を真剣まけんになつて訊きくの……。

だけど妾めかけどうしても、それに返事する事が出来なかつたのよ。……お前さんたちが云っているのはみんな嘘だ。ヤングはそんなに悪い人間じゃない。悪い奴はあの船の司令官一人だつて云つてやろうと思つても、どうしてもその訳を話す事が出来なかつたの。……何故つていうと、妾、正気に帰つてからちようど一週間ばか

りというもの、口を利くのが怖くて怖くてしようがなかったんですもの。どうしてもその時の恐ろしさが忘れられなくって「ハイ」とか「イイエ」とかいう短かい返事をするのさえ怖くて怖くてたまらない気がしてね。それを無理に口を利こうとすると、歯の根がガタガタ云い出して、すぐに吐きそうになって来るんですもの……仕方がないから丸で唾者おしみたようになって、眼ばかりパチパチさせていたら、警察の人達もとうとう諦らめてしまって、来なくなつたようよ。

……だけでも、そうして妾が一人ボツチになってから、ウトウトしようとする、すぐに、あの時の気持が夢になって見えて来て、寢床の中で汗ビツシヨリになりながら、一生懸命に藻搔もがかせ

られるの。夢うつつに敷布を噛み破つたり湯タンポを蹴り落したりしてね。その恐ろしさつたらなかつたわよ。そうして、そんな夢のおしまいがけにはキットあのヤングの悲しい、静かな声が、どこからともなくハツキリと聞えて来て、妾をサメザメと泣き出させたの。眼が醒めてから後^{あと}までも、妾は、そんな言葉の意味を繰り返し繰り返し考えながら眼をまん丸く見開いて、いつまでも暗い天井を見詰めていたわよ。

そのうちに十日ばかりも経つと、凍^{しも}傷^{やけ}の方が思ったよりも軽く済んだし、針金の痕^{あと}も切れ切れになつてお化粧で隠れる位に薄れて来たの。それにつれて身体^{からだ}がもとの通りに元氣付くし、口もどうにか利けるようになって来たので、寝ているわけにも行かな

くなくて、思い切つて舞踏場へ出て見たら、間もなく、あんたが遊びに来たでしょう。

それあ不思議といえはホントに不思議でしょうがないのよ。妾はあんたに会つたのが、神様の引き合せとしか思えないのよ。だつて初めてあんたに会つたあの晩ね、あの晩から妾はピツタリと、そんな怖い夢を見なくなつたのよ。おまけに前と比べると丸で生れかわつたように饒舌おしやべり娘になつてしまつてね……そうしてそのうちに、あんたがたまらない程可愛いくなつて来るにつれて、あのヤングが云つていた色んな言葉の本当の意味が、一つ一つに新しく、シミジミとわかつて来たように思うの。そうしてヤングから教おそわつた色んな遊びをあんたに教えて見たくてしようがなくな

って来たの。それも、当り前の打ぶつたり絞しめたりする遊びなんかじゃ我慢出来ないの……一と思いにあんたを殺すかどうかして終しまわなくちやトテモやり切れないと思うくらい、あんたが可愛いくて可愛いくてたまらなくなつたのよ。

……妾、それをやつとの思いで今日まで我慢していたのよ。何故つて、万が一にも妾からそんな話を切り出したら、あんたがビツクリして逃げ出すかも知れないと思つたからよ。……だけど、それがもう今夜という今夜になったらトテモ我慢がし切れなくなつちやつたのよ。

妾はきょうも、いつものように日暮れ前からこの室はに這はい入つて、お掃除を済まして、ペーチカに火を入れたの。そうしてスツカリ

お化粧を済ましてから、あんたを待ち待ち昨夜の飲み残しのお酒を飲んでいたら、そのうちに室へやの中が静かアに暗くなつてね。向家の屋根の雪の斑まだらと、その上にギラギラ光っている星だけがハッキリと見えるようになって来たじゃないの……妾もうスツカリあの晩と同じ気もちになつてしまつてね……たまらなく息苦しくて息苦しくて……。アラ……睡いつちや嫌いやよ。……睡いらないで聞いて頂戴つてばさあ……まあ嫌だ。本当に酔つちやつたのね……人が一生懸命に話しているのに……。

……ね……わかつたでしょう……あんたにもわかつたでしょう。妾のそうした気持ち……ね……妾、お酒に酔つて云つていないのよ……いいこと……ね。ね。だから妾は今夜こそイヨ

イヨ本当にあんたを殺そうと思つて、ワザワザこの短剣を買つて来たのよ。英国出来の飛び切りつていうのをサア。一寸御覧なさいつてば……このよく斬れること……妾の腕の毛がホラ……ヒイヤリとして……ね。ステキでしょう。いいこと。……この切っ尖さきであんたの心臓をヒイヤリと刺しとおして、その血のついた刃は先さきを、すぐにズブズブと妾の心臓に突き刺して死んで終しまおうと思つているのよ……トテモ気持ちのいい心臓と心臓のキツスよ。ヤングが教えてくれた世界一の贅沢な……一生に一度つきりの……アラツ……妾今やつと思ひ出したわ。日本の言葉で、こんな遊あそびの事をシンジュウつていうんでしよう、ね、ね。

……サア。本気で返事して頂戴よ。睡らないでサア。サアつて

ばサア。……いいわ。妾あんたが睡つてたつて構わないから……
そのまんま突き刺しちゃうから……いいこと……？　ねツ……死
んでくれるでしょう。ね……いいこと……殺しても……嬉しい……
……じゃ……お別れの乾杯よ……ね……そうして寢床へ行くのよ……
……サア……。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年3月24日第1刷発行

底本の親本：「押絵の奇蹟」春陽堂

1932（昭和7）年12月14日発行

初出：「新青年」

1929（昭和4）年4月号

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

支那米の袋

夢野久作

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>